

〈2020年度修士論文要旨〉

高槻ジャズストリートの実態に関する一考察

——新しいテーマ型コミュニティの生成に着目して——

鈴木 美帆

市民主体で開催される音楽の祭りが多くあり、特に、地域活性化を目的に音楽を活用したイベントや祭りが目立つ。祭りを支えるコミュニティとはどのような人たちの集まりなのだろうか。どのような人々の集まりが祭りを継続させることができ、地域に活気をもたらすことができるのだろうか。このような疑問を持ったことが本研究のきっかけである。

近年、特に都市部での地域コミュニティが衰退しつつあることは様々なところで指摘されており（山内 2009、西野 2017）、活性化を目的とした取り組みが行政や市民団体などあらゆる主体によりなされている。その中でも祭りやイベントは、地域に関心がなかった住民等も地域と関わりを持つきっかけになる（総務省 2014）ことから、多くの地域で開催されている。一方で、祭りやイベントの開催には熱量の高いコミュニティと資金調達が必要不可欠であり、これらを継続的に調達することの難しさから多くの祭りやイベントが短期的、単発的な開催となることが多い。

筆者は、自身の音楽振興活動を通して、音楽を支える継続的なコミュニティの必要性を感じ、音楽を中心とした演奏する人も演奏しない人も含めたコミュニティづくりに取り組んでいる。そのような取り組みの中で、「人と人をつなげる力を持つ」音楽（福島・中尾 2018）の祭りがどのように成り立っているのかに興味を持った。中でも、市民主体で20年以上継続的に開催され成長を続けている「高槻ジャズストリート」に着目し、祭りを支えるコミュニティの実態を調査する。

【定 義】

まず「市民主体」と表現するときの「市民」とは、公共政策学より「都市型社会では市民つまり社会を構成するすべての人々」を引用し、〇〇市の市民のような狭義ではなく、広く社会を構成する人々とする。

コミュニティについては、総務省（2014）にならい「（生活地域、特定の目標、特定の趣味など）何らかの共通の属性及び仲間意識を持ち、相互にコミュニケーションを行なっているような集団（人々や団体）」とする。

地域コミュニティは、同じく総務省（2014）の定義する「共通の生活地域（通学地域、勤務地域を含む）の集団」とする。なお、地域コミュニティと同義として使用される言葉に「地縁型コミュニティ」や「エリア型コミュニティ」があるが、本論では、より一般的に使われている「地域コミュニティ」を採用する。

テーマ型コミュニティについては、国民生活審議会（2005）の「地理的な境界にとらわれず、特定のテーマの下に有志が集まって形成される団体」とする。

ジャズフェスティバル（ジャズフェス）については、伊志嶺（2005）と大山（2018）を参考に以下の5つの条件を満たすものとした。①イベント名に「ジャズ」もしくは「ジャズフェスティバル」、「音楽祭」を冠しているもので、②複数プログラムを開催するもの、③一般公開しているもの、④継続性のあるもの、⑤ジャズ音楽を中心に開催しているもの。ただし、全プログラムがジャズであることと、入場料の有無には拘らないこととする

【先行研究】

先行研究では、近年特に都市部において、急激な人口変動や単身者の増加、核家族化に起因して、地域との結びつきや人々の間のきずなが弱くなっていることが多くいわれている。藤田ら（2003）は、地域の防災機能強化の観点からも地域コミュニティが極めて重要であり、日常的な地域活動が地域コミュニティの発達につながるなど、既存の地域コミュニティの活性化を指摘する研究は多い。

他方で、山崎・瀬田（2010）は、地域コミュニティでは「出る杭は打たれる」という意識があることや、起動力に欠けることを指摘している。

また奥山（2013）は、活動のために新規に形成されるテーマ型コミュニティは、地域コミュニティほどの強固な基盤がなく持続性がないとしながらも、その専門的な知識や経験、新しい発想を評価し、地域コミュニティが衰退している地域における活動ではテーマ型コミュニティが新しい担い手になる可能性を示している。

総務省（2014）は、地域衰退の改善策として、イベントや祭りが住民同士の交流につながりに有効であることを報告している。さらに、イベントや祭りを積極的に実行することは、地域への愛着形成を促すこと（引地・青木 2005）や、内との関係、外との関係の両方に新しい人間関係・ヒューマンネットワークが生まれる（出島 1996）として評価するものがある。

音楽や芸術、アートのイベントや祭りに関する研究で、筒井（2012）、小林（2011）は、地域経済の活性化が期待できるとしており、西野（2017）は音楽を活用することで地域コミュニティがゆるやかに繋がりと続けた。クリストファー・スモール（1998）が提唱した「ミュージッキング（music + ing）」という概念では、音楽に関わることを「音楽する」行為とした。演奏することはもちろんのこと、聴くこと、チケットのめぐりや楽器運搬、音響管理など音楽演奏に何らかの形で関わることを定義だとされている。このミュージッキングの概念は、音楽を活用したコミュニティのゆるやかな構築に向けて、音楽的知識や技能を有しない多くの人々が関与できる可能性を示唆すると西野（2017）は指摘している。

しかしながら、音楽の祭りによる新しいコミュニティの生成に着目したものは見当たらない。よって、本研究では音楽の祭りを支えるコミュニティの実態について調査する。

【研究の目的】

本研究の目的は、どのような人々が何を目的に集まり音楽の祭りを運営しているのか。市民主催の音楽の祭りを支えるコミュニティの実態を知ろうとするものである。

【研究手法】

祭りを支えるコミュニティの実態に関する先行研究や書物は見当たらなかった。したがって、本研究では先行研究からの手がかりがなかったため、現場のコミュニティの実態を明らかにするために現場のエスノグラフィーと関係者へのインタビュー、一部は質問メールでの質問と応答という方法を採用した。対象者はジャズスト発起人の北川潤一郎氏をはじめ、チェアマン真鍋宗一郎氏などジャズスト実行委員32名、店舗会場担当者16名、出演ミュージシャン（プロ・アマチュア）10名、高槻市とした。聞き取り内容としては、関わり方、関わったきっかけ、自分自身の変化や状況の変化等を中心に、それぞれの立場と会話の進む方向に合わせて多少変化させた。また、実行委員については、2～4名のグループインタビューを行い、高槻市についてはメールでのやり取りとなった。

【結 果】

ジャズストを支える人々の中で、実行委員というコミュニティが祭りの開催を支える鍵であることを確認した。当初、地域コミュニティを中心とした集団がテーマ型コミュニティを形成したが、現在では様々な立場や地域外からの参加者も増えその構成が変容している。実行委員は、地域内外問わず幅広い年齢層と多様な人々を巻き込み、ジャズストという実践を通して学習が継続されている実践コミュニティであることがわかった。

ジャズスト実行委員という実践コミュニティから新たに「食の祭り」が生まれ、「食の文化祭実行委員会」という新たなテーマ型コミュニティが生成され、ジャズスト同様に相互交流と学習が継続されている。安満遺跡青銅祭、高槻魂を運営するコミュニティも、実行委員で学んだ人々が中心に携わり新たな場所で新しい繋がりをつくりテーマ型コミュニティを形成している。

ジャズスト実行委員も同様に、自分たちで取り組むことができることを学び、市民主体で地域を盛り上げることができるという機運を醸成したといえる。

地域内外の様々な人にジャズストをボンドにしてネットワークが生まれ、新たなテーマ型コミュニ

ティをいくつも生成し、地域コミュニティが衰退している地域を活気付ける新しい担い手（奥山 2013）となっている。

【考 察】

本論では、高槻ジャズストリートに着目し、ジャズストを支えるコミュニティがどのような人たちで構成され、どのようなコミュニティであるのかを現場のエスノグラフィーと、関係者への聞き取り、メールによる質問と応答というやりとりで情報を収集した。得られた情報を質的に考察した結果、ジャズストを支えるコミュニティとしては、実行委員がもっとも活発なコミュニケーションを行っており、本論で定義する「コミュニティ」に相当することがわかった。さらに、ジャズストというテーマの下に集まったテーマ型コミュニティであり、多様な人が継続的に学習している実践コミュニティであることがわかった。

高槻は、地域コミュニティの衰退に関する問題を抱えていた地域であることは1章で述べた通りである。既存の自治会は現在もほとんど機能していないという。そのような中でジャズストが発案され、地域コミュニティ中心のテーマ型コミュニティが生成された。

ジャズストは、平成21年に内閣総理大臣にて認定された高槻市中心市街地活性化基本計画（大阪府下初）の中で「社会資本や産業資源」として、また「観光に関する現況分析」でも言及されている。平成24年からは毎年高槻市の主要施策の中にも取り上げられており、高槻市としても重要な資源として力を入れていることがわかる。さらに大阪府により平成21年大阪ミュージアム登録物に認定され、だんじり祭や天神祭とともにベストセレクションに選定されており、平成28年には地域観光資源として正式に認定されていることから、大阪府にも影響を与える祭りに成長したといえる。

国土交通省近畿運輸局が実施した近畿観光まちづくりアドバイザー会議からの「高槻市 観光まちづくりへの提案」（2011年）の中には、「ジャズストリートなど市民参画の意識の高いまち」や「ジャズストリートに携わるまちづくりのリーダー達を組織化して」と記載されており、単に大きな祭りとしてではなく、ジャズストリートに携わる人たちがまちづくりを牽引していることが評価されている。

ジャズストという音楽の祭りを支える実行委員は、単なるテーマ型コミュニティではなく、学習し相互作用し合う実践コミュニティであり、さらに地域の新しい担い手となりうる集団であることがわかった。

【今後の課題】

本研究では実行委員に着目して多くの情報を得たので、演者や企業など別の視座からでは違った結果になることも考えられる。また、ジャズストを支えるコミュニティのみを取り上げて、全ての音楽の祭りを支えるコミュニティについて語ることはできないので、他の同様のコミュニティとの比較は今後の研究としたい。